七夕和歌集

吉田栄司編

古典文庫

七夕和歌集

吉田栄司編

古典文庫

古典文庫第五五九冊

平成五年六月二十日印刷発行　非売品

七夕和歌集

編者　吉田榮司
発行者　吉田幸一
印刷者　白橋印刷所

発行所　114
東京都北区西ケ原三ノ三四ノ一二
古典文庫
電話（三九一〇）二七一七
振替口座東京九・一四五九七番

© KOTEN BUNKO, 1993. Printed in Japan

目次

凡例

一　七夕星歌抄　元禄頃刊　上下二冊……五

二　二十一代集七夕哥寄　宝暦七年刊　一冊〔本文は省略〕……一二三

三　七夕歌づくし　寛文十一年成　写一冊……一二五

四　七夕七十首和歌　寛延元年写　一冊……一三五

五　霊元法皇七夕七首御会　享保五年成　一冊……一四九

六　七夕百首　天保九年成　一冊……一八九

七　七夕由来同百首　江戸末期刊　玉蘭画　一冊……二〇三

八　新撰七夕狂歌集　天保三年刊　一冊……二三五

七夕歌についての考察……二八七
索　引　(一)・(二)……三三五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

凡　例

一、こゝに収めた和歌集・狂歌集は、いずれも七夕歌をのみ収録した特色ある書物で、これを底本にして忠実に翻刻した。

二、『七夕星歌抄』及び『七夕由来同百首』に出ている歌は、勅撰集・私家集に大部分が所収されているので、『新編国歌大観』により、その歌番号を漢数字で示し参考に供した。その際、語句に異同のある部分は（　　）を以て校異を示しておいた。

三、また『二十一代集七夕哥寄』の歌は、『七夕星歌抄』の歌と重複しているので、本文を記載せず、書誌の所で関連番号をもって表し、併せて校異もそこで述べた。なお索引では、Aの歌番号の次に（B）をもって示してある。

四、翻刻に当たっては、次の方針に従った。

1　漢字・仮名の別、仮名遣い・送り仮名等は、すべて底本のまゝとした。但

し、漢字の字体はおおむね通行書体にし、片仮名「ハ・ミ」の表記はそのまゝ生かした。

2　底本に誤脱や磨滅している箇所は、判読できる範囲で補い、誤字や判読できない部分は□または（ママ）と傍記した。

一

七夕星歌抄

元禄頃刊　上下二冊

七夕 星歌抄 上

もろこしにも、牽牛織女に詩をつくり、文をかきて翫ふ事、世ゝに見えたり、其中に柳宗元ハ、乞巧の文とて、古今に名ある文をつくれり、大和にも七夕のこゝろをよめる和歌多し、星合のこゝろを天の川のふかきによそへ、一夜といへとも、たえぬちきりをたむける糸すちのなかきにたとへ、羽をならふる鵲のはしにねかひをかけて、さま〳〵に、よミをくことの葉しけくそなれりける、しかハあれと、七夕の和哥とて、是のミをあつめたる、ありもやすらん、いまた見侍らす、猶乞巧奠のおほやけことハ、子細も侍るとなむ、予は、たゝ七夕の古哥のミを書にそなへむと思ふこゝろさし年久し、其処ハいとけなきわらハの、手習ふねかいとて、此夕にハ、七夕の

和哥をかきてたてまつる事世のならハしとせり、しかれとも、をさなき人ハ、おほくの哥書のうちにて見出しかたく、いたつらに、世に聞ふるしたることの葉のミにて、用意をとゝのへ侍る事かたし、そのいはけなき心のほとあハれに覚えて、学文のいとまに、七夕の哥をあつめ、一冊として壱蒙のたすけにもと、書こにしるすものならし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

○万葉和歌集

北湖彙

「新編国歌大観」歌番号以下第二巻万葉

詠七夕哥　　よみ人しらす

1　天川やすのかハらのさたまりて心くらへハときまたなくに　（二〇三七）

人丸

2　天河かちのをときこゆ彦ほしと七夕つめとこよひあふらしも　（二〇三三）

3　ひこほしと七夕つめとこよひあハん天の川せ(と)に浪たつなゆめ　（二〇四四）

4　天川せことにぬさをたてまつる心ハきミをさちく(き)いませと　（二〇七三）

5　こまにしきひもときかハし七夕(ひこほし)のつまとふよひそ我もしのハん　（二〇九四）

よみ人しらす

6　天河うきつの浪とさハくなりわか待きミし舟出すらしも　（一五三三）

7　秋風に河浪たちぬしハらくハやそのふなつにミ舟とゝめん　（二〇五〇）

8 秋風のふきたゝよハすしらくもハ七夕つめのあまつひれかも　（二〇四五）

七夕　人丸

9 わかこふるにのほのおもハこよひもか天の河原にいそまくらまく　（二〇〇七）

題しらす　よミ人しらす

10 はた物のふミきもていて天川うちはしわたすきミかこんため　（二〇六六）

11 天川きりたちのほる七夕のくもの衣のかへるそてかも　（二〇六七）

12 ひこほしの川せをわたるさほ舟のとゆきてはてんかハつしそおもふ　（二〇九五）

中納言家持

13 七夕のふなのりすらしまそかゝミきよき月よにくも立わたる　（三九二三）

○古今和歌集

題しらす　よみ人しらす

14 秋風の吹にし日より久方のあまのかハらにたゝぬ日ハなし　以下第一巻古今（一七三）

15 久方のあまのかハらのわたし守きミわたりなハかちかくしてよ　（一七四）

16 天川もみちをはしにわたせハや七夕つめの秋をしもまつ　（一七五）

17 こひ〳〵てあふよハこよひ天川きりたちわたりあけすもあらなん　（一七六）

寛平御時、なぬかの夜、うへにさふらふおのこ
とも、哥たてまつれとおほせられける時、人に
かハりてよめる　とものり

18 天川あさせしら浪たとりつゝわたりはてねハあけそしにける　（一七七）

おなし御時、きさいの宮の歌合のうた　藤原おきかせ

19 ちきりけん心そつらき七夕の年にひとたひ逢ハあふかハ　（一七八）

なぬかの月よめる（夜）　凡河内ミつね

20 としことにあふとハすれと七夕のぬるよの数そすくなかりける　（一七九）

21 七夕（織女）にかしつるいとのうちはへて年のをなかくこひやわたらん　（一八〇）

題しらす　　そせい

22 こよひこん人にハあハし七夕の久しきほとに待もこそすれ　（一八一）

なぬかのよのあかつきによめる　　源むねゆきの朝臣

23 今ハとてわかるゝ時ハ天川わたらぬさきにそてそひちぬる　（一八二）

やうかのひよめる　　ミふのたゝみね

24 けふよりハ今こん年のきのふをそいつしかとのミ待わたるへき　（一八三）

題しらす　　よみ人しらす

25 天川くものみおにてはやけれハひかりとゝめす月そなかるゝ　（八八二）

七月六日七夕の心をよみける　　藤原かねすけ（朝臣）

26 誹諧部（歌）一 いつしかとまたく心をはきにあけてあまのかハらをけふやわたらん　（一〇一四）

○後撰和哥集

源昇朝臣時〻まかりかよひける時に、ふむ月

の四五日計のなぬかの日の、れうにさうそく
てうしてといひつかハして侍けれハ　閑院

27 あふことハ七夕つめにひとしくてたちぬふわさハあへすそありける　後撰（二三五）

たいしらす　よみ人しらす

28 天川わたらん空もおもほえすたえぬわかれとおもふ物から　（二三六）

七月七日に、ゆふかたまてこんといひて待けるに、雨ふり侍けれはまてこて　源中正

29 雨ふりて水まさりけり天川こよひハよそにこひんとやみし　（二三七）

返し　よみ人しらす

30 水まさりあさきせしらす成ぬともあまのとわたる舟ハ（も）なしやハ　（二三八）

なぬかの日に、女のもとにつかハしける　藤原兼三

31 七夕（織女）もあふよ（せイ）ありけり天河このわたりにハわたるせもなし　（二三九）

かれにける男の、七日のよまてきたりけれは、
女のよみて侍ける　　よみ人しらす

32 ひこほしのまれにあふよのとこ夏ハ打はらへともつゆけかりけり　（二三〇）

なぬか、人のもとより返事に、こよひあハん
といひをこせて侍りけれは

33 こひ〳〵てあハんとおもふ夕くれハ七夕つめもかくやあるらし　（二三一）

返し

34 たくひなきものとハわれそ成ぬへき七夕つめハ人めやハもる　（二三二）

題しらす

35 天川なかれてこひハうくもそあるあハれとおもふせにはやくミん　（二三三）

36 玉かつらたえぬ物からあら玉の年のわたりハたゝ一夜のミ　（二三四）

37 秋の夜の心もしるく七夕のあへる今夜ハ明すもあらなん　（二三五）

38 ちきりけんことのは今ハかへしてん年のわたりによりぬるものを　（二三六）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton